

# 『竹取物語』奈良絵本・絵巻の本文考

—正保三年刊整版本の独自異文を視点とした粗描—

曾根 誠 一

はじめに

『竹取物語』の奈良絵本・絵巻は、「五十余点」<sup>①</sup>伝存するという。これらの絵に関する研究は、ようやく本格化しつつあるようだが、それに比して、本文に関する言及は多くはないようである。

石川透氏は、奈良絵本・絵巻の製作時期を、次のように分類しておられる。<sup>②</sup>

- I期 天正頃（黎明期）一五六五～一五九五年頃
- II期 慶長頃（絢爛期）一五九五～一六二五年頃
- III期 寛永頃（生産期）一六二五～一六五五年頃
- IV期 寛文頃（最盛期）一六五五～一六八五年頃
- V期 元禄頃（終息期）一六八五～一七一五年頃
- VI期 享保頃（末裔期）一七一五～一七四五年頃

この分類に『竹取物語』整版本の刊行を重ねると、嚆矢

の正保三年（一六四六）刊本（林甚右衛門尉版）はIII期・生産期の後期にあたり、続く寛文三年（一六六三）刊本（長尾平兵衛版）はIV期・最盛期の前期にあたり、絵入刊本の嚆矢である元禄五年（一六九二）刊本（長尾平兵衛版）はV期・終息期の前期にあたっている（整版本は全て同じ板木を用いて、江戸期だけでなく明治期まで刷られ続けた）。すなわち、六期に分類された百八十年のうち、生産期の後期から最盛期を含む百年程の期間に整版本は刊行され続け、流布していたことになる。とすると、奈良絵本・絵巻が依拠した伝本を究明するための最初の分類基準として、正保三年刊整版本本文と比較することは、整版本系か否かを大別するのに有効性を持つように思われる。

このことは、中野幸一氏が御所蔵の九曜文庫蔵『竹取物語絵巻』複製本の解説で、奈良絵本・絵巻の本文のほとん

どが古活字本系（第三類第三種）であるという中田剛直氏<sup>①</sup>の説を紹介しつつ、御所蔵本が「正保三年刊の製版本本文に近いと思われる」（132頁）と指摘した上で、次のように述べておられることも連関しよう。

『竹取物語』の伝本は、一、二、三を除いては室町期までさかのぼるものはない。そのような現況での本文研究

は、新井信之氏、中田剛直氏らの努力によって、ようやく古本系、流布本系と二大別されてはいるものの、細部にわたってはそれぞれになお異同があり、さらに諸本間の精査が必要とされる段階である。その点、江戸前期の成立になる奈良絵本・絵巻の詞書本文も、古写本の少ない『竹取物語』の本文研究の重要な資料として、十分活用に値するものと思われる。<sup>⑤</sup>（133頁）

中野氏の指摘は妥当なものであるが、全ての奈良絵本・絵巻が該当する訳ではなく、「十分活用に値する本文を有する」伝本を絞り込むための目安となる分類基準の設定が必要であろう。そのための準備作業として、正保三年刊製版本の独自異文を基準として分類・検討することは、大別するための一つの目安として有効であるように思われる。

本稿では、上記の理由に基づいて、調査し得た『竹取物語』

奈良絵本・絵巻の伝本本文について、正保三年刊製版本との親疎関係、有り体にいえば、製版本の転写本なのか否かを解明し、本文の実態にある程度の見通しを立ててみたいと思う。

## 一

『竹取物語』の正保三年刊製版本本文の成立については、夙に川瀬一馬氏<sup>⑥</sup>が「正保以後の製版本は第三種本より出ている」（507頁）と指摘され、二冊本となった嚆矢である古活字十行乙本（第三種本）と十一行丙本（第四種本口種）・丁本（同イ種）は、「同種活字印本で元和寛永中の刊行」であるとされている。また、中田剛直氏は、古活字十一行丙本と丁本について、「丙本と丁本の前後及び製版本の直接原本は不明だが、丙本に一箇所「中納言」が「中言納」なる活字顛倒の誤植があり、厳密に本文の上からいへば、製版本は丁本を受継いだものともいへるが、この点断定は不可能である」（219頁）と慎重を期しておられる。正保三年刊製版本の親本の問題については、別稿を用意しているのでそれに譲ることとし、今は十一行丙本・丁本と製版本の三伝本間の異同を調査して、その中における製版本の独自異文を

掲げると、十二箇所を指摘できる（意味の異同を伴わない仮名遣いの異同と、読みが確定できない活用語尾を省略した漢字の例は、対象から除外した）。これは、中田氏が夙に作成しておられる「竹取刊本相互の異同一覧表」を再確認する作業であったが、極めて微少な訂正を加えることができたようである。

この整版本の独自異文十二例を掲げると、次の通りである（上段は乙・丁本、下段は正保整版本本文）。

- ① ひとりくにあひ奉給へや——ひとりくにあひ×給へや（上四裏5）
- ② 三日はかりありてこきがへり給ぬ——三日はかり有てこき×××給ぬ（上八表6）
- ③ こしかたゆくすゑもしらす——こしかた行すゑもしらて（上十裏2）
- ④ うみにまきれんとしき——うみにまきれんとし×（上十裏2）
- ⑤ くひか、らんとしき——くひかくらんとしき（上十裏4）
- ⑥ ふはさみに文をはさみて——ふはさみ×文をはさみて（上十二表8）

⑦ もろとも|同所に——もろとも×|同所に（上十二裏7）  
⑧ 此かははた×|やすくなきものなり——此かははたは|やすくなきものなり（上十五表4）

⑨ いか、はそむくへきとの給ひて——いか、はそむくへきとの給ふ（上十八裏1）

⑩ こしなんう|かれぬ——こしなんう|と|かれぬ（下五表5）

⑪ 書はつる。た、入給ひぬ——書はつる。たえ|入給ひぬ（下五表7）

⑫ 此十五日×|は人々給はりて——此十五日|には人々給はりて（下十三表4）

これらの異文を、中田氏「校異篇」で確認すると、①「あひ×給へや」は、「奉」を欠脱した事例である。古本系統の友時本を除く六伝本と一致する外、通行本系統第三類第三種口種本の竹取物語抄本・中田本・五十嵐本・松本本とも一致するが、正保整版本の下位本文である。②「こき××給ぬ」は、「かへり」を欠脱した事例であり、下位本文の竹取物語抄本と一致するだけである。③「しらて」は、連用中止法の「ず」を、接続助詞「て」を含めた「ずて」の短縮形「で」に誤った事例である。第一類第三種の山岸本

と一致する外、第三類三種口種の竹取物語抄本・松本本・中田本・五十嵐本と一致する下位本文である。④「まきれんとし×」は、連用中止法で文章が後に連続すると誤読して、文末の助動詞「き」を欠脱した事例である。第一類第三種の前田本・山岸本の外、第三類三種口種の竹取物語抄本・五十嵐本と一致する。⑤「くひかくらん」は、踊り字を「く」に誤読した事例である。「か、らん」が原態本文であることは文脈から容易に判断できるため、古本系統の太氏本と一致するだけである。⑥「ふはさみ×」は、格助詞「に」を欠脱した事例であり、接続が不自然になっている。古本系統の太氏本に「ふみはさみ×」とあり、「に」を欠脱する同様の例が確認されるだけである。⑦「もろとも×」も、格助詞「に」を欠脱した事例であり、接続が不自然になっている。古本系統の京大本・高安本と第一類三種の前田本の外、第三類三種口種の竹取物語抄本・松本本・五十嵐本と一致する。⑧「たはやすく」は、この本文の方が主流であり、「た×やすく」とあるのは、第一類一種の高山本と第二種の久曾神本、第三類一種の蓬左本・吉田本・久曾神本と第三種口種の徳本本・古活字十一行甲本・同乙本・十行乙本・十一行丙本・同丁本・反町本の十二伝本だ

けである(全四十六伝本)。⑨「の給ふ」は、「給ひて」と文章が後に連続するのを誤読して終止させた事例である。古本系統の太氏本と一致する外、第一類三種の山岸本と第三類三種口種の竹取物語抄本・松本本・中田本・五十嵐本とも一致するが、下位本文である。⑩「うとかれぬ」は、「こ(己)」を字形の類似から「と(止)」に誤読した事例で、文意も通じがたい。第一類一種の平瀬本と第三類三種口種の竹取物語抄本と一致する。⑪「たえ入」は、これが正統な本文であり、「た、入」は「え」を踊り字の「、」に誤読した事例で、文意は通らない。「た、入」は、第二類の北島本と第三類三種口種の古活字十一行丙本・同丁本だけである。⑫「十五日には」は、古本系統の新井本・似閑本・太氏本・友時本・京大本・高安本の外、第一類二種の武田本と第三種の山岸本、第二類の度会本・荒木田本、第三類一種の蓬左本・吉田本・久曾神本、第二種の丹羽本・尊経閣本、第三種口種の古活字十一行甲本・竹取物語抄本・中田本・五十嵐本・竹取物語裏解本と一致する。

以上、古活字十一行丙本・同丁本と正保三年整版本の三伝本間における整版本の独自異文十二例について、中田氏の校異篇を参照しつつ検討を加えてみたが、⑧⑪の二例を



絵巻（『竹取物語絵巻』 勉誠出版 二〇〇八年七月）

1188……チェスター・ビーター・ライブラリー蔵1188本

絵巻（針本正行氏『物語絵巻の本文とその享受に関する総合的研究』 二〇一〇年三月掲載の翻刻）

東京……東京大学蔵絵巻（国文学研究資料館蔵マイクロフィルム）

立教……立教大学蔵絵巻（同大学図書館HP） 右の表の検

討に先立ち、絵巻十二伝本の本文が正保整版本系統のものであるのか否かを大別するために、正保整版本及びその親本の系統と理解されている古活字十行乙本・十一行丙本・同丁本に共通する異文の一例である「色好み」五人の名を列挙する条を引用してみたい。

その名一人はいしつくりの御子、一人はくらもちの御子、一人は左大臣あへのみむらし、大納言一人は大伴のみゆき、中納言一人はいそのかみのもろたか、此人々なりけり。（正保整版本・3表）

これと各伝本の当該箇所を本文と比較すると、CBL<sub>1</sub>本を除く他の十一伝本は、右の正保整版本の本文と一致している（九曜文庫蔵絵巻本に二箇所目の「一人は」を脱落する異同あり）。これに右の〈表1〉の正保三年整版本

の独自異文との重なり具合を勘案すると、『竹取物語』絵巻の殆どは、正保整版本系統の本文を書写しているという見通しが立つのである。

因みに、CBL<sub>2</sub>本の当該箇所の本文は、次の如くあり、相違している。

その名とも、石つくりの御子、くらもちの御子、左大臣あへのみむらし、大納言大伴のみゆき、中納言いそのかみのもろたり、この人々なりけり。

ではCBL<sub>2</sub>本は、如何なる系統の伝本に依拠して書写されたのであろうか。この問題を考える時、冒頭部で竹取の翁がかぐや姫を家に持ち帰った後の、次の叙述が参考になろう。

めの女にあづけてやしなはす。うつくしきことかぎりもなし。いとおさなければ、手はこに入てやしなふ。

傍線部の「手はこ」という本文は、元来は「こ」（籠）であるのが、直前の接続助詞「ば」との文字上の接続に基づく誤読から「はこ」（箱）となり、それが更に小さな箱という意の「手はこ」になった下位本文である。これを有する伝本は、中田氏「校異篇」によれば、通行本（流布本）系統第二類本の島原本（現日本大学本）・北島本と校合書き入

れ本文である度会本・荒木田本の四伝本と、第三類第三種本口種本である古活字十一行乙本（新宮春三氏蔵）<sup>⑦</sup>・反町本である。

そこで、第二類本に共通する独自異文は、整版本上巻は前述の四伝本で、下巻は北島本を除く三伝本で考えるべきであるとの中田氏の指摘（199頁）に従い、先ず、上巻に相当する十四例を表にまとめると、次の通りである（二類本四伝本と反町本の本文確認は「校異篇」に拠ったため、漢字・平仮名の区別は厳密ではない）。

〈表2〉 \*○印は、第二類本共通の独自異文と同一であることを表わす

	二類本共通の独自異文（正二伝本保三年整版本）	古活字11乙本	反町本
①	手箱にいれて（は） （やうに）	○	○
②	きこゆる×××みたまへ （やうに）	やうに	やうに
③	とりかたき物を申づる（×××）	×××	×××
④	欠文（舟のうちをなんせめて見るゝ山いとおほきにてあり）	あり	あり
⑤	舟に乗ぬ（）	て	て
⑥	つくりつかふまつりに（こと）	こと	こと
⑦	わらひつるも引かへて（さ）	さ	さ
⑧	天然よりたまさか（に）	○	○
⑨	欠文（何おほす）	なにおほす	なにおほす

⑩	すこしにこそあれ、かならずをくるへし（××××××××）	○	××××××××	は
⑪	欠文（なんちらか君の使用と仰事はいかかはそむくへきとの給ひて）	○	なんちらゝとの給ひて	なんちらゝとの給ひて
⑫	欠文（ものめともは）	○	ものめともは	ものめともは
⑬	波はけしきに（けれ共）	○	けれ共	けれ共
⑭	おほけなく心をさなく（音）	○	を	を

CBLL125本は、右表に明らかな如く、第二類本の共通独自異文十四例中九例が一致しており（⑪）「いかかは」の欠文はCBLL125本の独自異文）、相違する五例の内の四例④⑨⑫も、欠文を補った事例である。残る②の例は、「やうに」を欠脱していて文意が通りにくいので、補ったものである。すなわち、CBLL125本は、二類本系統の伝本に基づいて書写されたことが判明するのだが、その親本は、欠文を補い異本の本文を傍記する等、校訂された伝本であつたようである。

では、如何なる伝本で校訂されていたのか、それを解明する手懸かりを、整版本の下巻に相当する共通異文十五例（CBLL125本との一致十例、誤写二例・欠文二例・欠字一例）の中に求める時、次の二例を見出すことができる。

	二類本共通の独自異文(正保三年整版本)	二類本	古活字11乙本	反町本
⑮	欠文(××××と申、人たに見れはうせぬ)	××××と申、人たに見れはうせぬ	はらくかど申、人たにみれはうせぬ	××××と申、人たにみれはうせぬ
⑯	いか、いけたるわざ(く)	いく、いけたるわざ	い、いけたるわざ	いく、いけたるわざ

CBL125本の右の二例と一致する本文を有する伝本と

しては、古活字十行乙本・十一行丙本・同丁本・正保整版本・反町本が該当する。渡辺雅子氏はCBL125本の絵師について、「CBL本『竹取物語』の絵画様式は次の世代である狩野探幽、尚信、安信兄弟よりむしろ彼らの叔父にあたるしかし同時代に活躍した狩野長信近辺で制作されたのではないか」(149頁)<sup>8)</sup>と述べ、一六三〇年代の成立と考えておられるようである。これに従うと、一六四六年刊の正保三年整版本は該当せず、反町本は書誌を含めた詳細が不明であり、⑩の異文もあるので除外すると、古活字十行乙本・十一行丙本・同丁本の何れかであったということになるのだが、それ以上の絞り込みは困難である。

また、CBL125本は第二類本中ほどの伝本に近いのかを、中田氏が掲示する各伝本の独自異文を手懸かりにして考えると、島原本十二例中四例(第一・二・七・十二例)が一

致しており、北島本八例・度会本五例・荒木田本五例には一致する例を見出すことができない。すなわち、島原本それ自体ではないが、現存伝本中では島原本に近い本文を持つ伝本を親本とする一方で、欠文や文意の通りにくい箇所は、古活字十行乙本・十一行丙本・同丁本の何れかを参照して補ったのであろう。

最後に、CBL125本の目移りによると思しい本文欠脱箇所三例を指摘しておく。

- ・かくておきな、やうくゆたかになりゆく。此のちこやしなふほとに、すくくとおほきになりまざる。三
- ・の目にはすもゝを二つけたる様也
- ・たこしつくらせ給ひてに

これと一致する欠文を有する伝本は、「校異篇」に拠る限りでは確認できない。

次に、正保整版本系統の本文を書写していると思われる残る十一伝本の、「表1」に見える正保整版本に対する異文について、略述してみたい。

②「かへり」を補記する伝本として、九曜文庫本・ハイド旧蔵本・小型絵巻本の三本があるが、「おはしましぬと人

には見え給ひて、三日はかり有て」という直前の文脈を承けるのが「こき給ぬ」では、収まりが悪い。「かへり」は十分に推測可能であるし、古活字本等の他の伝本を繕げば疑問の余地はなかつたろう。その一方で、①「奉」を補記した伝本がないのは、竹取の翁がかぐや姫に五人の求婚者の誰か一人と結婚してほしいという自らの願望を呈示する発言としては、「あひ給へや」でも文意は通り、求婚者との身分差を表現する「奉」がなくとも不都合はなかつたからであらう。このことは、補記を判断する基準が文意が通るか否かにあつたことを示唆している。③「しらす」は東京大学本だけであり、親本を丁寧に読まずに思い込みで書写した結果生じた異文であらう。⑤「くひか、らん」は、逸翁美術館本・九曜文庫本・諏訪市博物館本・小型絵巻本・CBL1288本の五伝本に見られるが、「むくつけ、なるもの、きて」という文脈からも、正保整版本の「く」が「」の誤写であることは容易に推測できたからであらう。ハイド旧蔵本の「く」は「く」を誤読したのであらう。⑥⑦に見える「に」の補記は、「ふはさみ×文を」「もろとも×同所」という格助詞「に」を欠く収まりの悪い表現だからであるが、⑥は九曜文庫本・小型絵巻本の二伝本、⑦は九

曜文庫本・CBL1288本・東京大学の三伝本に留まっているのは、無意識裡に補われたことを示唆している。⑩「うこかれぬ」は、直前の「こしなん」との繋がりを考えれば、「と」が字形の類似による「こ」の誤写で、「動かれぬ」であることは自明であり、九曜文庫本・ハイド旧蔵本・小型絵巻本・CBL1288本の四伝本が改めている。

次に、各伝本ごとの特徴について言及すべきであるが、紙幅の都合もあり、〈表1〉において異文が五例と最も多い九曜文庫本を手懸かりにして、書写の実態を考える目安としたい。

九曜文庫本は、正保整版本に対して、脱字二十三例、衍字三例、誤写十二例・増補七例がある一方で、正保整版本本文の誤りを訂す二十三例が確認される。〈表1〉に掲げた五例を除く十八例を掲げると、次の通りである（引用本文は九曜文庫本、括弧内は正保整版本本文、丁数）。

- ① ないしのはちの涙なかれき（け、上7表）
- ② たからなりけるかちたくみ六人を（う、8表）
- ③ 世の中にいき何か×せんと思ひ（て、10表）
- ④ まことにほうらいの木かとこそ（誠×、13表）

⑤人を出してもとめてたてまつる（×、15表）

⑥くひものに殿のうちのきぬわたせになと（け、18裏）

⑦たつころしてそかくひの玉とれるとや聞（ね、19裏）

⑧たつころさんととめ給×へはあるなり（候、20裏）

⑨こやすのかひとりたるかとはせ給ふ（むか、下1裏）

⑩まめならん人一人をあらこにのせすへて（た、2表）

⑪あななひをこほち人みなかへりまうてきぬ（し、2裏）

⑫まことにはくらくめすつくれり（誠×、3表）

⑬百官人くあるしいかめしうつかうまつる（か、9表）

⑭おもやの内には女ともはんにおりて守らす（た、13裏）

⑯さかみをとりてかなくなりおとさん（し、14表）

⑰あまの羽ころもきるおりそ君をあはれと思ひいてたる

（ころも、18表）

⑱ふとあまの羽ころもうちきせたてまつりつれば（れ、

18表）

⑲つはもの共あまたくして山へのほりけるより（も、19

裏）

右の事例から、九曜文庫本は、正保整版本本文の誤りを

訂していることが判明するのであるが、他の伝本を以て校

訂した訳ではなく、気付いた範囲に留まることは、（表1）

の残る六例の正保整版本の独自異文を校訂していない事例から推測できよう。

また、こうした書写者の姿勢は、元来ない語句の増補や思い込みによる誤写等を生ぜしめる場合がある。その事例を掲げると、次の通りである（引用本文は九曜文庫本、括弧内は正保整版本本文、丁数）。

①あきたなよ竹のかくや姫と名付侍る（×、上2表）

②かくや姫のいはくよくもあらぬたかちをふかき心もし

らて（×、4裏）

③おきなのはく思ひのことくもの給ふかな（×、4裏）

④聞ゆるやうに申給へといへは御子たち上達部（見、6

裏）

⑤かまとを三重にしこめて高みらを入給ひつ、（たく、

8表）

⑥えんにはひのほり給ふことはりにおもふ（ぬ、9裏）

⑦ぬきかへなてなん立まふてきつるとの給ふおきな聞て

（へは、11裏）

⑧たつこのくひにある五しきのひかりある玉あなり（××、

17裏）

⑨いとよき事かなとてあななひをこほち（なり、下2裏）

㊸ おきなかしこまつて御返し申やうこのめのわらは、たへて宮つかへ（事、6裏）

㊹ みかとの、給はんことにつかん人き、やさしからしといへは（×××、7裏）

㊺ みかとおおせの給はく宮つこまるか家は山もとちかく也（×、8表）

語句の増補には、「の」を補って語調を整えた㊶㊷の例や、理解し易い表現に改めた㊸「名付」㊹「くひにある五しき」㊺「おほせの給はく」の他、「やさし」の語義を誤って「からじ」と活用語尾と打消意志の助動詞を補った㊻の例がある。それ以外は、思い込みによる誤写の例であるが、㊼は第5図「蓬萊の玉の枝を見まもるかぐや姫」の直前の文章であることから、正保整版本の「の給へは」と後に連続する文章を、意図して「の給ふ」と言い切る形式に改めた事例である点で、注意される。

最後に、九曜文庫本の五文字以上の欠文を掲げておく。

- ・まことほりたりもとのめとはかくやひめを（二行分）
- ・是をなん玉さかるとは云はしめける

以上述べてきたことをまとめると、正保整版本に依拠し

ていないCBL125本を除く十一伝本の絵巻本文は、〈表1〉の正保整版本の独自異文との一致数の多い伝本程、整版本に忠実な本文を有し、一致数の少ない伝本程、整版本の誤りを気付いた範囲で訂していると推定されるのである。換言すれば、絵巻各伝本の本文は、正保整版本と九曜文庫本の範囲内に位置付けることができるように思われる。

三

次に、管見に入った『竹取物語』奈良絵本十一伝本について、正保三年整版本の独自異文十一例との本文異同を掲げると、次の通りである。

〈表3〉

\*○印は、正保整版本と同一であることを表わす

正保整版本 (丙・丁本)	白杵	九支	神宮	曜甲	曜乙	中京	東北	宮本	龍甲	龍乙	東洋
①あひ×給へや (巻)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
②こき×× (かへり)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
③行すゑもしら (す)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
④まされんとし ×(き)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	欠文
⑤くひからん (い)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	欠文
⑥ふはさみ×文 を(に)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○



丁本との極めて近しい関係は、右の比較表によっても明らかで、さきの異同部の、丙本一七箇所、丁本の一一六箇所中のそれぞれと一〇七箇所の共通本文をもっている<sup>⑩</sup>（317頁）と述べておられる通りであろう。下巻を欠いているため、古活字十一行丙本と丁本のいずれに依ったのかは、確定できない。

次に、正保整版本系統の本文を書写していると思しい残る十伝本の、〈表3〉に見える正保整版本に対する異文について、略述してみた。

②「かへり」を補記する伝本として、白杵市立図書館本・九曜文庫甲本の二伝本があるが、前節で既述したように、直前の文脈との続き具合が悪く、十分に推測可能であるため、意味を勘案して補われたのであろう。⑤「くひか、らん」は、白杵市立図書館本・神宮文庫本・九曜文庫甲本・中京大学本・東北大学の五伝本に見られるが、「むくつけ、なるもの、きて」という文脈からも、正保整版本の「く」が、「」の誤写であることは容易に推測できたであろう。⑥⑦に見える格助詞「に」の補記は、「ふはさみ×文を」「もろとも×同所」という、収まりの悪い表現だからであるが、⑥は

白杵市立図書館本・九曜文庫甲本の二伝本、⑦は白杵市立図書館本・東北大学の二伝本に留まっているのは、無意識裡に補われたからであろう。⑩「うこかれぬ」は、直前の「こしなん」との繋がりが、「と」が字形の類似による誤写であることに容易に気付きそうに思われるが、九曜文庫甲本が改めているだけである。

次に、各伝本ごとの特徴について言及すべきであるが、紙幅の都合もあり、〈表3〉において異文が五例と最も多い白杵市立図書館本を手懸かりにして、書写の実態を考える目安としたい。

白杵市立図書館本は、正保整版本に対して、脱字二十二例、誤写九例（漢字の訓読四例を含む）・増補十五例がある一方で、正保整版本本文の誤りを訂す二十八例が確認される。この二十八例うち、〈表3〉に掲げた五例と、前節で引用した九曜文庫蔵絵巻本<sup>⑪</sup>と一致している十八例を除き、残る五例を掲げると、次の通りである（引用本文は白杵市立図書館本、括弧内は正保整版本本文、丁数）。

⑤かまとを三えにしこめてたくみらを入たまひつ、（×、上8表）

① はちこれにすくるはあらし女をえすなりぬるのみにあ  
らす (×、13裏)

② これを見たてまつりてそ国のつかさもほ、えみたる  
(う、21裏)

③ ともすれば人まにも月を見てはいみし×くなき給ふ  
(、下10表)

④ なをものおもへるけしきなりこれを見てあか仏何事お  
もひ給ふぞ (有、10裏)

この五例は、前節で論じた九曜文庫蔵絵巻本では訂され  
ておらず、白杵市立図書館本は、より多くの正保整版本本  
文の誤りを訂していることが知られるのである。

ただ、こうした書写者の姿勢は、元来ない語句の増補を  
促すことにも繋がり、その数は九曜文庫蔵絵巻本七例の二  
倍以上になって、しかも一例も重なっていない。その十五  
例を掲げると、次の通りである (引用本文は白杵市立図書  
館本、括弧内は正保整版本本文、丁数)。

⑦ 此子いとおほきになりぬれば名をはみむるといんへの  
あきたをよひて (×、上2表)

⑧ をる人たにたはやすくみるましきものをなをよるはや  
すきいもねす (××、2裏)

⑨ うんしてみなかへりぬなをこの女を見ては世にあるま  
しき心ちの (×、6裏)

⑩ その山のさまたかくうるはしきこれやわかもとむる山  
ならん (×、11表)

⑪ 玉の木をつくりつかうまつりし事この国をたちて千余  
日にちからを (×、12表)

⑫ 此かはきぬの入たるはこを見ればくさくのうるはし  
きるりを (×、15裏)

⑬ このかは衣は火にやかんにやけすはこそまことのなら  
めとおもひて (×、16裏)

⑭ おほせの事はいとまたうとした、この玉はたはやすく  
えとらしを (×、18表)

⑮ かくやひめすへんにはれいのやうにはみにくしとのた  
まひて (×、19表)

⑯ こ、ろもとなかりていとしのひてた、ひとりとねり二  
人をめしつきとして (×××、19裏)

⑰ をちなき事する舟人にもあるかなとえしらてかくいふ  
(×、19裏)

⑱ 神さへいた、きにおちか、るやうになるはたつをころ  
さんと (×、20裏)

⑤しぬるいのちをすくひやはせぬと書はつる比たえ入たまひぬ(×、下5表)

⑥御門きこしめしておほくの人をころしてけるこゝろそ

かし(×、6裏)

⑦きのふけふみかとのたまはん事につかへん人き、やさし(×、7裏)

これを見て、先ず注意されるのは、正保整版本の上巻部分に十二例下巻部分に三例と、偏りが見られることである。

これは、既述した九曜文庫蔵絵巻本も同様で、上巻五例下巻二例となっている。上巻二十二丁下巻十九丁という丁数の差を勘案しても説明はし難く、特徴の一つとして指摘するに留めておく。

増補の殆どは、助詞や活用語尾を一字補って語調を整え、理解し易く改めた事例である。そうした中で注意される事例に言及すると、⑧「なを」は、恋い焦がれて止まない求婚者達の心情に即して強める表現となっており、⑨「この国」は、本来は「五穀」であるのだが、「この国」という正保整版本の表記では理解しにくいので「の」を補ったものである。⑩「ひとり」は、直前の「た、」との連接と、「とねり」との文字の近似性から誤読して補った後、誤りに気付

いて改めて「とねり」と記したものであろうか。奈良絵本・絵巻の本文書写の特徴の一つに、ミセケチと書き入れの極度の僅少さがあるが、こうした事実は、奈良絵本・絵巻における本文の位置を示唆しているように思われる。依拠した親本に対して、必ずしも厳密・丁寧な態度で書写された訳ではないようなのである。⑪は、格助詞「に」を補うことで、直後の断定の助動詞「なる」が動詞の「鳴る」の意に変更されて、理解し易くなっている。

最後に、白杵市立図書館本の五文字以上の欠文としては、「あるときいはんかたなくむくつけ、なるもの、きてくひか、らんとしき」の傍線部分があるだけである。

以上述べてきたことをまとめると、正保整版本に依拠していない龍谷大学蔵甲本(中川文庫本)を除く十伝本の奈良絵本文は、(表3)の正保整版本の独自異文との一致数の多い伝本程、整版本に忠実な本文を有し、一致数の少ない伝本程、整版本の誤りを気付いた範囲で訂していると推定されるのである。換言すれば、奈良絵本各伝本の本文は、正保整版本と白杵市図書館本の範囲内に位置付けることができるように思われる。

## 結語

『竹取物語』の奈良絵本・絵巻の本文について、管見に入つた絵巻十二伝本と奈良絵本十一伝本について、正保三年刊整版本の独自異文十一例を目安にして、親疎関係を論じてみた。その結果、絵巻では、CBL1125本が二類本系統の伝本を親本として書写され、奈良絵本では龍谷大学蔵甲本（中川文庫本）が古活字十一行丙本か丁本の何れかを親本として書写されていることが判明した。換言すれば、この二伝本を除く絵巻十一伝本と奈良絵本十伝本は、正保整版本を親本として書写されていることが判明したのである。とはいえ、〈表1〉〈表3〉の異同と具体的に検討を加えた九曜文庫蔵絵巻本と白杵市立図書館蔵奈良絵本の事例から明らかのように、書写者は、正保整版本の誤りを訂して書写することがあったのであり、その姿勢は、本来はない語句を増補して語調を整え、理解し易く意改する結果を招来することにも繋がったのである。

奈良絵本・絵巻の本文は、正保整版本の独自異文十一例との一致数の多い伝本程、整版本に忠実な本文を有し、一致数の少ない伝本程、整版本の誤りを気付いた範囲で訂し

ていると考えられるのである。

最後に、簡便な判別方法を再確認して、稿を閉じることにする。

\*古活字十行乙本・十一行丙本・同丁本・正保三年整版本系統の判別の目安

その名「人はいしつくりの御子、一人はくらもちの御子、一人は左大臣あへのみむらし、大納言一人は大伴のみゆき、中納言一人はいそのかみのもるたか、此人々なりけり。（正保整版本・3表）

\*正保三年整版本の判別の目安

独自異文十一例との異同（〈表1〉乃至〈表3〉参照）

### 〔注〕

(1) 「座談会 王朝物語の絵画―竹取『伊勢』を中心に」(武蔵野文学』Wide vol.01 二〇一〇年九月)における針本正行氏の発言。7頁。

(2) 石川透氏編『奈良絵本・絵巻の宇宙 カラー版』(非売品 二〇一〇年三月) 6頁。

(3) 九曜文庫蔵『竹取物語絵巻』(勉誠出版 二〇〇七年七月)

(4) 中田剛直氏『竹取物語の研究 校異篇解説篇』(塙書房 一九六五年六月) 本稿中の中田氏に関する引用は、特記

なき限り当該書による。

- (5) 同様の趣旨の指摘は、夙に中野氏編『奈良絵本絵巻集 竹取物語』（早稲田大学出版部 一九八七年十一月）「解説」3頁でもされている。

- (6) 川瀬一馬氏『古活字版之研究』（安田文庫 一九三七年十月）、増補版は一九六七年十二月刊。

- (7) (4) 前掲書「解説編」によると、新宮氏蔵古活字十一行乙本は、「巻頭の二丁目表一面。及び巻末の一丁分を闕き、また後半以下になると紙面の下左隅が破れてなく、裏打してその部分を適当な本文で補闕してある」(251頁) 由である。この特徴と一致する「岡田真之蔵書」の旧蔵印を有する古活字本が天理大学附属天理図書館に所蔵(九一三・三一・一七、昭和卅一年貳月壹日受入) されていることを報告しておく。尚、冒頭と巻末の欠丁部分は、正保三年整版本の本文で補写されている。

- (8) 渡辺雅子氏「CBL本『竹取物語絵巻』二巻」(『竹取物語絵巻』勉誠出版 二〇〇八年七月)

- (9) 同様の事例として、国学院大学蔵『竹取物語絵巻小型絵巻』の下巻「絵1」の直前の文章「つかうまつるましき事を参りて申さんとて参りて申也」(正保整版本「やう」) があることが、針本正行氏『物語絵巻の本文とその享受に関する総合的研究』(二〇〇九年三月) 81頁で指摘されている。

- (10) 中川浩文氏『竹取物語の国語学的研究』(思文閣出版 一九八五年三月)

#### 付記

本稿を成すに際して、御所蔵本の閲覧及び複写を御許可いただきました諸機関に対して、篤く御礼申し上げます。

また、二〇一一年度花園大学特別個人研究費による研究成果の報告書として執筆したものであり、活動するに際して御配慮を賜りました方々に対して、深謝申し上げます。

(そね・せいいち／日本文学科教授)

